

罪・罪の許しなどについて詳述される。著者はアベラールについて「およそ筆者とは気質の違う人間を前にして筆は洩りがちで、なかなか波長を合わせることができなかった」(跋)と書いておられる。しかしこの最終章では「波長」がぴったり合ったのであろうか、のびやかに筆を動かしておられる。この分野について予備知識の乏しい評者は、多くのことを学ばせていただいた。

著者がまだ論じておられない12世紀の作家は多い。この時期の精神史に今後とも健筆をふるわれることを期待して、この拙評を終わりたい。

John Corcoran and John Swiniarski:
Logical Structures of Ockham's Theory of Supposition.

Franciscan Studies (The Franciscan Institute, New York),
vol. 38, annual XVI, 1978, pp. 161—183.

Graham Priest and Stephen Read: Merely Confused
Supposition, A Theoretical Advance or a Mere Confusion.

Idem, vol. 40, annual XVIII, 1980, pp. 265—297.

渋谷克美

Franciscan Studies に掲載された、これら二つの論文は、オッカムの「代示」suppositio の理論に関する相反する解釈を提示している。これらと関連する論文としては、更にまた、同じ著者 Graham Priest and Stephen Read の“The Formalization of Ockham's Theory of Supposition,” *Mind*, 86 (1977), pp. 109—113, 及び Hermann Weidemann, “William of Ockham on Particular Negative Propositions,” *Mind*, 88 (1979), pp. 270—75. があり、これら四つの論文の関係は次のようになっている。先づ1977年に Priest と Read が *Mind* に、オッカムの代示の理論についての或る一つの解釈を提示しており(論文①)、次に、この解釈の反論として、1978年に Corcoran と Swiniarski が *Franciscan Studies* に(論文②)、1979年に Weidemann が *Mind* に

(論文③), 別の解釈を提示し, 更にもう一度 Priest と Read が 1980 年に *Franciscan Studies* のなかで, 反論に答えて自己の主張を弁護している(論文④)。

(→ Priest と Read の解釈(論文①) §2. The Formalization, §3. Consequences, 論文④ §2. The Descensus as requiring Equivalence, §4. The Formalization, §5. Comments on the Formalization) —周知のごとく, オッカムの代示の理論において, 「共通的個体代示」*suppositio personalis communis* は, 特定代示 *suppositio determinata*, 一括的な不特定共通代示 *suppositio confusa tantum*, 配分周延的な不特定共通代示 *suppositio confusa distributiva* の三つに分類されるのであるが, Priest と Read はこれらの代示を次のように解釈している。(i) 特定代示とは, 例えば「或る人間が走る」という命題の主語「人間」のように, 或る共通な名辞が, その名辞の概念のうちに含まれている個々のもの, この人間, あの人間へと, 選言命題を用いて下降する(この人間が走る, 或いはあの人間が走る, 或いは……)ことができ, しかも元の命題「或る人間が走る」と, 下降することによって形成された単称命題の選言が等値である場合である。すなわち, 「或る人間が走る」が, 「この人間が走る, 或いはあの人間が走る, 或いは……」という選言の命題群と等値であり, 相互に含意することが成立するならば, 「人間」という名辞は特定代示をもつ。(ii) 配分周延的な不特定共通代示とは, 例えば「すべての人間は動物である」という命題の主語「人間」のように, その名辞の概念のうちに含まれる個々のものへと, 連言命題を用いて下降する(この人間は動物であり, 且つあの人間は動物であり, 且つ……)ことができ, しかも元の命題と, 下降することによって形成された単称命題の連言とが等値である場合である。すなわち, 「すべての人間は動物である」が, 「この人間は動物であり, 且つあの人間は動物であり, 且つ……」という連言の命題群と等値であり, 相互に含意することが成立するならば, 「人間」という名辞は, 配分周延的な不特定共通代示をもつ。(iii) 一括的な不特定共通代示とは, (i)や(ii)の仕方では下降することはできないが, 「すべての人間は動物である」という命題の述語「動物」のように, 選言述語 *disiunctum praedicatum* をもつ命題を用いて, その名辞の概念のうちに含まれる個々のもの, この動物, あの動物へと下降する, 例えば, 「すべての人間は, この動物か, あの動物か, ……かである」というように下降することはでき, しかも元の命題と, 下降によって形成された命題が等値である場合である。すなわち, 「すべての人間は動物である」が, 「すべての人間はこの動物

か、あの動物か、……かである」という命題と等値であり、相互に含意することが成立するならば、「動物」という名辞は、一括的な不特定共通代示をもつ。このような Priest と Read の解釈の特徴は、「オッカムがこれら三つの代示を、下降という論理的な概念によって定義した際に、彼は、元の命題と下降によって形成された全命題群とが等値であると考えていた」と解釈する点である（論文① p.110, 論文④ § 2, pp. 268—274）。

Priest と Read は更に、このような解釈に基づいて、オッカム自身が特称否定命題の述語の代示に関して或る誤りを犯したと主張する（論文① §3, pp. 111—112, 論文④ § 5, pp. 289—290）。すなわち、Priest と Read によれば、オッカムは特称否定命題、例えば「或る人間は白くない」の述語「白い」が配分周延的な不特定共通代示をもつとしている（*Summa Totius Logicae*, I, cap. 74, *Tractatus Logicae Minor*, III）が、これは次の理由から誤りである。もしオッカムの言うように、「白い」が配分周延的な不特定共通代示をもつならば、「或る人間は白くない」という命題と、「或る人間はこの白いものではない、且つ或る人間はあの白いものではない、且つ……」という連言の命題群とが等値であり、相互に含意できるはずである。然し、「或る人間は白くない。ゆえに、或る人間はこの白いものではない、且つ或る人間はあの白いものではない、且つ……」という推理は成立するが、逆の推理、「或る人間はこの白いものではない、且つ或る人間はあの白いものではない、且つ……ゆえに、或る人間は白くない」は成立しない。このことは、仮に人間がプラトンとソクラテスの二人だけしか存在せず、しかも二人とも白いものであるケースを考えれば、明らかであろう。それゆえ、特称否定命題の述語は配分周延的な不特定共通代示を持つのではなく、むしろ一括的な不特定共通代示を持つと、Priest と Read は述べている。

(⇒) Corcoran と Swiniarski（論文②）、Weidemann（論文③）の反論——この Priest と Read の解釈に対して、Corcoran と Swiniarski, Weidemann は次のように反論している。1) オッカムは彼の三つの論理学書のいずれにおいても（*Summa Totius Logicae*, I cap. 74, eds. P. Boehner, G. Gál & S. Brown, *Opera Philosophica* I, St. Bonaventure, 1974, p. 229. *Elementarium Logicae*, ed. E. Buytaert, *Franciscan Studies*, 25, 1965, p. 212. *Tractatus Logicae Minor*, ed. E. Buytaert, *Franciscan Studies*, 24, 1964, p. 68), 特称否定命題の述語は配分周延的な不特定共通代示を持つ、

とはっきり述べている。オッカムがうっかり誤って此の事を述べたとは考え難い（論文② pp. 175—176）。2) むしろ、オッカムが三つの代示を、下降という論理的な概念によって定義した際に、彼は、元の命題と下降によって形成された全命題とが等値であると考えたとする Priest と Read の解釈のほうが誤っている（論文② § 5 The Priest-Read Formalization, § 6 Conclusions pp. 180—181. 論文③ p. 272）。すなわち、或る名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つのは、「すべての人間は動物である」という命題の主語「人間」のように、その名辞の概念のうちに含まれる個々のものへと、連言命題を用いて下降することができる場合であるとオッカムが述べた（*Summa Totius Logicae* I, cap. 70）時に、彼が条件として挙げているのは、Priest と Read の解釈のように、元の命題と下降によって形成された単称命題の連言とが等値になるような下降、 $(\dots\dots人間\dots\dots) \leftrightarrow \{(この人間\dots\dots) \wedge (あの人間\dots\dots) \wedge \dots\dots\}$ が可能なことではない。「人間」という名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つためには、単に $(\dots\dots人間\dots\dots) \rightarrow \{(この人間\dots\dots) \wedge (あの人間\dots\dots) \wedge \dots\dots\}$ という下降が可能であることだけで充分であって、必ずしも元の命題と下降によって形成された単称命題の連言とが等値である必要はない。オッカムが例として挙げている全称肯定命題の主語の場合には確かに、「すべての人間は動物である」という命題と、「この人間は動物である、且つあの人間は動物である、且つ……」という連言の命題群は等値になり、相互に含意することが成立するけれども、然し、名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つための条件のなかに、等値であることが含まれることはない。元の命題と、下降によって形成された命題の間に常に等値であることが成立するのは、特定代示、一括的な不特定共通代示の場合に限られる（論文② § 2, Ockham's Theory of Personal Supposition: Definitions, pp. 168—174）。3) 名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つための条件としてオッカムが挙げているのは、連言を用いて単称命題へと下降すること descent to the conjunction $(\dots\dots人間\dots\dots) \rightarrow \{(この人間\dots\dots) \wedge (あの人間\dots\dots) \wedge \dots\dots\}$ が可能なこと（DC と略記）だけではない。逆に、一つの単称命題から元の命題へと「上昇する」 ascent こと、 $(この人間\dots\dots) \rightarrow (\dots\dots人間\dots\dots)$ 、例えば、「この人間は白い、ゆえに、すべての人間は白い」という推理が不可能なこと（ $\sim A$ と略記）も、「人間」という名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つために必要な条件である。Corcoran と Swinarski によれば、名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つためには、DC & $\sim A$ が成立する必

要がある。全称肯定命題、例えば「すべての人間は白い」という命題の主語「人間」の場合には、①「すべての人間は白い。ゆえに、この人間は白い、且つあの人間は白い、且つ……」という下降が可能、すなわち DC が成立し、しかも②「この人間は白い、ゆえに、すべての人間は白い」という上昇は不可能、すなわち $\sim A$ が成立する。それゆえ、「人間」という名辞は配分周延的な不特定共通代示を持つのである。Priest と Read は、この $\sim A$ という条件を無視している（論文② p. 181）。

更に又、このような解釈を提示した上で、Corcoran と Swinarski は、特称否定命題の述語も、この DC& $\sim A$ という条件を満たすことを証明している（論文② §3. The Predicate of the Particular Negative Proposition, pp. 175—176）。例えば、「或る人間は白くない」の述語「白い」は、連言命題を用いて下降することが可能（DC）である。すなわち、「或る人間は白くない。ゆえに、或る人間はこの白いものではない、且つ或る人間はあの白いものではない、且つ……」という推理は成立する。そして又、それらの一つの命題から元の命題へと上昇することは不可能（ $\sim A$ ）である。すなわち、「或る人間はこの白いものではない。ゆえに、或る人間は白くない」という推理は成立しない。従って、特称否定命題の述語「白い」は、DC& $\sim A$ という条件を満たしており、配分周延的な不特定共通代示を持つ。それゆえ、特称否定命題の述語は配分周延的な不特定共通代示を持つと、オッカムが述べているのは誤りではない（論文③ p. 275）。むしろ、元の命題と下降によって形成された全命題群とが等値になる必要があると考えた、Priest と Read の解釈のほうが誤っている。

⇒ Priest と Read の自己弁護——この反論に答えて、Priest と Read は論文④ (§2. The Descensus as requiring Equivalence, pp. 268—274) のなかで、13世紀初期から14世紀にかけての、代示の理論における「下降」という概念の推移、歴史的発展という面から、彼らの解釈を弁護している。すなわち、最初の時期、例えば William of Sherwood のころには、下降とは、「すべての人間が走る、ゆえに、この人間が走る」のように、一つの単称命題への下降のみが考えられており、上昇も、「この人間が走る、ゆえに、すべての人間が走る」のように、一つの単称命題からの上昇のみが考えられていた。然し、代示の理論が完成した時期、例えば Albert of Saxony のころには、元の命題と、下降によって形成された全命題群とが等値になるような下降が考えられるようになった。上昇ということが言われる場合でも、それは、一つの命題からの上昇ではな

く、複数の命題全体から元の命題への上昇が考えられている。オッカムの場合も、彼自身は明確には述べていないが、やはり元の命題と下降によって形成された全命題群とが等値になるような下降を考えていたのである。更に又、名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つために必要なものとして Corcoran と Swiniarski が挙げている、一つの単称命題から元の命題への上昇が不可能である ($\sim A$) という条件は、オッカムのなかに見出だされる、古い時代の考えの名残りであって、彼の代示の理論のなかで重要な役割を果たすものではない。

以上が Priest と Read の自己弁護であるが、然しこれまで述べてきたごとく、Priest と Read の解釈では、特称否定命題の述語の代示に関してオッカムのテキストそのものと矛盾することになる。書評者が考えるに、このことは彼らの解釈の致命的な欠点なのではないか。更に又、彼らの自己弁護が正当なものであるとも思われない。これらの問題については、稿を改めて論ずることにしたい。

日本クザールヌス学会編
『クザールヌス研究序説』

国文社、1986年、327頁

熊田 陽一郎

本年二月に刊行されたこの論文集は、現在の日本におけるクザールヌス研究の水準を示すものであるが、他方従来余り知られていなかったこの思想家についての啓蒙的解説の役割を踏まえて、ゆきとどいた構成を示している。

「青年時代のクザールヌス」(酒井修)を頭に、小山・酒井紀幸両氏による『知ある無知』をめぐるクザールヌスの思考の成立と方法を説く論文を据え、以下、『推測論』(大出)、『知ある無知』からの無限の問題(藺田)、『可能現実存在論』(八巻)、『隠れたる神についての対話』(リーゼンフーバー)と、大体において一研究者が一著作を分担する形でクザールヌス思想の本質的内容が論じられる。その後「クザールヌスとネオプラト